

## 結核を科学しましょう

## —療養雑誌『保健同人』の誕生とその歩みを追って—

結核研究所

アーカイブ委員会委員 青木 純一

2024年春、保健同人社元社長、大渡肇氏より結核予防会に対し、同社がこれまでに刊行した雑誌・書籍・新聞等を寄贈したい旨の申し入れがあった。結核予防会は、本会アーカイブ事業に資するだけでなく、結核予防会の歴史を知る上でも貴重な資料だと判断し、受け入れを決めた。ほどなく段ボール40箱、月刊誌の合本を含め1,000点を超える資料が届いた。以降、「大渡文庫」として必要な保存と管理に取り組んでいる。

## 大渡順二氏の来歴と保健同人社の誕生

戦後の結核対策で、患者への知識普及・啓蒙啓発の観点から保健同人社の果たした役割は大きい。そこで、創業者であり、肇氏の父である大渡順二氏（以下敬称略）の足跡を辿りながら、発足当初の保健同人社の活動を振り返るとともに、大渡文庫の中から当時を代表するいくつかの資料を紹介する。

大渡順二は、明治37（1904）年、岡山県に生まれる。京都帝国大学中退後、昭和4（1929）年に朝日新聞に入社、13年間の記者生活のあと、民間企業を経て昭和21（1946）年2月に保健同人社を創設した（図1）。

民間企業時代の昭和18（1943）年4月、大渡は結核を発病する。結核が不治の時代にはよくある話だが、大渡もまたマムシの黒焼きを食し、肺病に効くとなれば、お灸や身体摩擦を試し、新鮮な空気が良いと聞け

ば、夜中でも窓を開け放つ生活をした。そんな当時を、「あれも迷い、これも迷いの連続でした」<sup>1)</sup>と悔やむ。ところが、このときの辛い療養体験が、のちに保健同人社を立ち上げる動機となる。

療養雑誌『保健同人』の刊行が大渡の最初の仕事だが、初刊の巻頭に「願い」と題する大渡の言葉を掲げた。それは、「健かなるも驕らず、病めるも屈せず、あかるく、逞しく、力をあわせ、お互の手で、お互のために、たすけあいましょう。」から、「結核を科学しましょう。」まで、わずか12行の簡単な文章だが、療養体験から学び取った大渡自身の教訓であった（図2）。

## 結核予防会の協力と保健同人社の発展

保健同人社と結核予防会の間には長い歴史がある。疎開先の京都で胸郭成形術を受けた大渡が、ふたたび東京に戻って術後の確定診断のために訪れたのが結核予防会北沢予防所、のちに盟友と呼ばれる隈部英雄（結核研究所第4代所長）との邂逅である。2人は出会った最初から結核医療をめぐる激しい議論を交わす。一方で、お互いの率直さが信頼を築きあげ、いつしか「岡・隈部学派の啓蒙に一役買いたい」<sup>2)</sup>と願う大渡であった。「岡・隈部」とは、隈部とその恩師、岡治道（結核研究所第3代所長）であり、「学派」とは、臨床と病理を統合した岡治道由来の新たな診断学であ

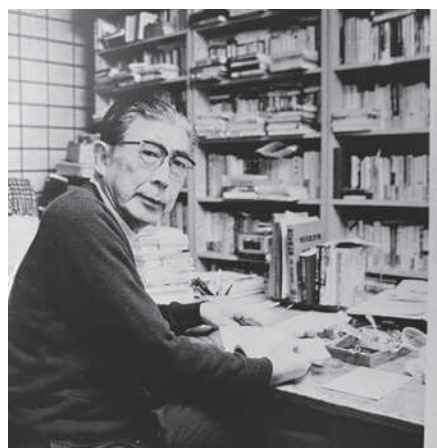


図1 77歳当時の大渡順二氏（書斎にて）  
出典 大渡順二（1981）グラビアから

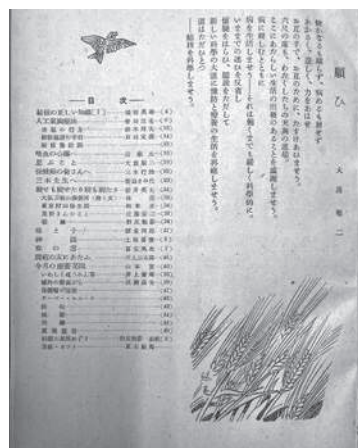
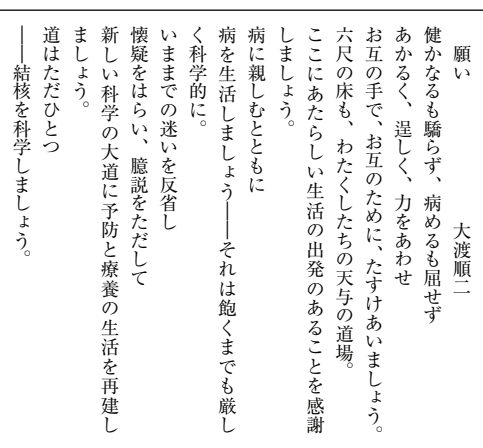


図2 大渡順二の「願い」 出典『保健同人』（創刊号）より

右の文章は、旧字体と旧仮名遣いを編集部で新字体と現代仮名遣いに変換した



る。そして、「啓蒙」の一役が、療養雑誌『保健同人』の刊行にほかならない。保健同人社は、こうして神田三崎町の結核予防会ビルの一室を借りて出版事業を開始した。

保健同人社は、社員わずか7人の船出であったが、すぐに時代の寵児となる。終戦直後の結核のまん延がひとつの理由だが、大渡のもつ広い人脈や5年先、10年先を見据えた企画力や判断力、そして何より、患者第一の編集方針があったからである（図3）。

保健同人社は、出版事業を周辺から支える様々な活動にも積極的に取り組んだ。昭和22（1947）年には、患者の病床数が絶対的に少ない当時の状況下、自宅療養の促進と在宅者にバターなど必要な生活物資の配給を目的に東京地方自宅療養者協同組合を結成、昭和25（1950）年になると全国自宅療養者連合会へと拡大した。同じ22年には国に依存しない民間主導の結核対策を推進する財源づくりとして、結核予防基金を創設した。昭和23（1948）年には一般公衆衛生の啓蒙を目的に、予防会理事長勝俣稔を会長に、財団法人保健文化協会を設立。昭和26（1951）年になると、ラジオ放送による療養指導、「明るい療養」を開始。加えて、昭和29（1954）年に「人間ドック」という新しい診療システムを開発したのも保健同人社であった。

#### 保健同人社を代表する雑誌・書籍・新聞

発足当初の保健同人社の出版物から、代表する雑誌、書籍、新聞をそれぞれ紹介する。まずは療養雑誌『保健同人』。社名を付した看板雑誌である。昭和21（1946）年6月の創刊号が、B5判で全50頁、年会費36円で7千部を印刷した。刊行当初から多数の療養関係者に注目され、療養所によっては一冊の『保健同人』を数十人の患者が回し読みするような盛況ぶりであった。内容は、結核専門医による解説、患者の質問・疑問に答



図3 昭和27年頃の保健同人社社員一同（場所は結核予防会の避難階段、右から9人目が大渡氏）  
出典 大渡順二（1981）のグラビアから

える「質疑応答」、文芸短歌、俳句、このほか療養生活に必要な様々な情報を載せた。

創刊号の執筆者には、結核予防会から隈部英雄、鈴木邦夫、新井英雄、厚生省関係者から芦田定蔵や三木行治、日本医療団の近藤宏二の名もあった。まさに官民一体の豪華な顔ぶれである。その後も、岡治道、柴田正名、岩崎龍郎、北錬平、島尾忠男など、多数の予防会関係者が執筆し

た。表紙の絵柄は三色すみれ、昭和を代表する日本画家、東山魁夷の仕事である（図4）。結核で弟を亡くされた東山氏とのご縁による。奇抜にも、『保健同人』は、患者からの「質疑応答」を雑誌の頭に置いた。これも「患者



図4『保健同人』創刊号の表紙  
（画・東山魁夷）  
出典『保健同人』（創刊号）から

の立場でつくる雑誌」を掲げればこそその企画であった。

2つ目が、隈部英雄著『結核の正しい知識』。結核療養のバイブルと言われた名著で、昭和24（1949）年に刊行する。隈部が『保健同人』に連載した記事を一冊にまとめたものだが、装丁はB6判400頁、定価300円であった。本書は、出版後すぐに毎日出版文化賞を受賞する。最先端の知識を誰もがわかる言葉で伝えたところに受賞理由があった。

3つ目が、旬刊誌『保健タイムス』、タブロイド版8頁の一般公衆衛生新聞である。当時の保健婦や公衆衛生業務に携わる人を対象に、昭和23（1948）年2月に刊行する。混乱する戦後の厚生行政や保健問題にしばしば一石を投じた貴重な新聞だが、新聞紙ゆえの経年劣化が目立つことから、保存方法の改善が急がれる。

このほか、千葉保之・所沢政夫著『結核初感染の臨床的研究』（1948年）といった学術書、シルバー世代向け雑誌の草分けとなる『これから』（1953年）の刊行など、保健同人社は「医療」「保健」「健康」の分野で多数の出版物を世に送り出している。結核予防会は、貴重な資料の数々を整理・保存するとともに、広く情報の公開に努めることで、保健同人社と大渡家のご厚意に応えたいと考える。🐱

注)

- 1) 大渡順二著（1981）『病めるも屈せず ―保健同人の旗をここに―（大渡順二文集Ⅰ 私史）』保健同人社、17頁。
- 2) 同前、54頁。